『オリエント』第58巻第1号抜刷
2015年9月30日発行

トルコ共和国におけるナクシュバンディー教団
エレンキョイ・グループとその機関誌『金の樋』

上　野　愛　実

2 0 1 5

日本オリエント学会

トルコ共和国におけるナクシュバンディー教団
エレンキョイ・グループとその機関誌『金の樋』

Erenköy Group of Naqshbandi Order in the Republic of Turkey:
An Analysis of the Journal *Altınoluk*

上野愛実^{*}
UENO Manami

ABSTRACT The Turkish Republic has forbidden the activity of Sufi orders (*tarikāt*) since the early years of its founding. However, a certain number of them have continued their activity in the form of cultural organizations or philanthropic foundations, but avoiding identifying themselves as Sufi orders in public. This article aims to show how Sufi orders could survive under these circumstances, by taking the example of the Erenköy group of the Naqshbandi order, one of the most influential Sufi groups in today's Turkey. To do so, it analyzed the journal of the group, *Altınoluk*.

The Erenköy group started publishing its monthly journal in 1986 and still continues to do so. For the members of the group, subscribing to the journal is considered to be part of their practice of Sufism, and the journal plays an important role in connecting them with the leader of the group. The journal articles cover both religious and non-religious topics. My analysis revealed that in the late 1990s the journal changed its coverage of non-religious topics. This change coincided with “the 1997 Military Memorandum,” the *de facto* coup against the ruling Islamic party that had come into power the year before. Before 1997, *Altınoluk* carried numerous articles that criticized current politics. However, after the former Islamic party was banned from politics in 1998, the journal suddenly stopped carrying articles related to politics. Instead, articles related to social services, women, and individual lives started to appear. Especially, since 2000, articles about the social services of its own foundations have been very important for *Altınoluk*. These changes correspond well with the tendencies in Turkish society, and it seems that the Erenköy group is changing itself along the direction of these social changes.

I. はじめに

トルコ共和国においてタリーカは、その建国初期以来、法的には活動を禁止されており、今日のトルコにおいては他者に対してタリーカとしての姿を表さず、慈善、文化、教育団体や出版社などとして活動を存続させている。そうした社会団体としての活動を行うと同時にタリーカは、人々に宗教実践の場を提供し、宗教的な知識の伝達に寄与することで、近年トルコで高まりを見せているイスラーム派の動きを下支えしていると言われている。⁽¹⁾ これまで指摘されてきたように、こうしたタリーカに関して注目

^{*} 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程

Graduate student, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

(1) H. Yavuz, *Islamic Political Identity in Turkey*, New York & Oxford: Oxford University Press, 2003, 133-150; I. Ozgur, *Islamic Schools in Modern Turkey: Faith, Politics, and Education*, Cambridge: Cambridge University Press, 2012, 118-119. イスラーム派 (İslâmcı/İslâmi kesim) の明確な定義はないが、ここでは、イスラーム的な価値に重要性をおき、政治や社会においてそれを志向する人々とする。Y. Aktay (ed.), *İslâmcı, Modern Türkiye’de Siyasî Düşünce* Cilt 6, İstanbul: İletişim Yayınları, 2004 を参照。

すべき特徴のひとつが、シャイフと教団員との対面的な関係によってではなく、機関誌という媒体を通じて広範囲にその活動を展開し、タリーカとしての紐帯を維持している点である。⁽²⁾では、彼らは機関誌を通じてどのような主張を表明し、教団内で共有しようとしてきたのだろうか。こうした問いに答えることは、トルコにおいてタリーカがいかに命脈を保ち、その勢力を維持、拡大してきたのかを明らかにする一助になると思われる。本稿では、こうした観点から事例研究を積み重ねるべく、トルコのタリーカの主要な団体のひとつ、ナクシュバンディー教団の一派であるエレンキョイ・グループ (Erenköy Cemaati)⁽³⁾を取り上げる。

今日のトルコにおいては一般に、タリーカに対しては否定的なイメージが付与されることが多く、それだけに、トルコのタリーカはイスラームの社会表出が進む今日においても、他者に対して強い警戒心を抱いており、彼らから直接情報を得ることは困難である。⁽⁴⁾1990年に刊行されたジェッラーヒー教団に関する研究を草分けとして、⁽⁵⁾聞き取りや参与観察から得られた情報を含む個別のタリーカ研究が発表されてきているものの、そうした研究は依然としてごく少数に留まっている。⁽⁶⁾加えて、こうした研究のなかには、対象としたタリーカが一部の敵対者やメディアから嫌がらせなどを受けないよう、あるいは対象としたタリーカから非難されないように配慮するあまり、客観性や中立性を欠いた研究が少なくない。⁽⁷⁾

こうしたなか、情報が限られた、現存するトルコのタリーカを研究する上で頼ることができるのが彼らの機関誌である。タリーカが出版している機関誌は、表向きには特定のタリーカとの関係が表明されているわけではないものの、事情に通じた人々のあいだではどの雑誌がどの教団・グループの機関誌であるかは知られている。本稿で取り上げるエレンキョイ・グループも機関誌を有する団体のひとつであり、そうしたタリーカのなかでも長期にわたって機関誌を刊行し続けている。

こうした側面は、エレンキョイ・グループを通時的な視点から分析することを可能にし、そしてそれは、トルコのタリーカに関する研究に見られる不足を補うことにもつながる。これまでの研究では、各タリーカが教団内外に向けて社会活動を展開させていることや、トルコの社会や政治体制に適合した「民主的」な性格を有していることなどが明らかにされてきた。⁽⁸⁾しかし、そうした研究は、時間軸を捨象した分析を行ってきたために、時代とともに変化する政治、社会状況に各教団がどのように対応した

(2) Yavuz, *Islamic Political Identity*, 150.

(3) 現在、トルコにはナクシュバンディー教団の系譜を引く、独立した4つの主要な集団が併存している。そのなかには、指導者としてシャイフを擁し、ナクシュバンディー教団の系譜を存続させているものと、シャイフ没後、後継者を擁立せずに存続しているものがある。前者は一般にタリーカ、後者はタリーカではない宗教団体と見なされることが多いが、両者ともに集団を意味するジェマート (cemaat) と呼ばれることが多い。一方、近年では、日本語で「ジェマート」と言った場合、ギュレン運動やヌルジュなど、タリーカではない宗教運動や宗教的な集団が想起されることが多い。このように、ジェマートは多義的な用語であり、本稿ではタリーカではないジェマートとの混同を避けるため、エレンキョイ・ジェマートをエレンキョイ・グループと呼ぶ。

(4) 筆者は2007年から2008年の1年間、2010、2011年に各1ヶ月間、2012年から2014年の2年間にわたるトルコ滞在を通じ、タリーカの現地調査を試みてきたが、ムスリムではない筆者に門戸を開いてくれる教団は非常に少なく、参与観察を許可してくれた例外的なタリーカのなかでも、表面的な部分のみしか公開しないというスタンスを取られる場合が多かった。

(5) F. Atacan, *Sosyal Değişme ve Tarikat: Cerrahiler*, İstanbul: Hil Yayınları, 1990.

(6) 例えば、Ö. R. Aras, "Organizational Structure of Islamic Mysticism: The Case of Galibi Order," Ph. D. Dissertation, The Middle East Technical University, 1997; E. Y. Demirci, *Modernisation, Religion and Politics in Turkey: The Case of İskenderpaşa Community*, İstanbul: İnsan Publications, 2008.

(7) トルコにおけるタリーカを研究する際の障壁については、以下を参照。M. Kara, *Metinlerle Günümüzde Tasavvuf Hareketleri*, İstanbul: Dergâh Yayınları, 2002, 605-607.

(8) Atacan, *Sosyal Değişme ve Tarikat*; Demirci, *Modernisation, Religion and Politics in Turkey*.

のかという視点は希薄である。⁽⁹⁾ また、通時的な視点をとることは、以下の点からも有益だと考えられる。他のタリーカ同様、エレンキョイ・グループに関する個別研究はほとんど見当たらないが、これまでの研究に見られる断片的な記述からは、エレンキョイ・グループが1990年代から2000年代初頭にかけて大きく伸長したことを読み取ることができる。⁽¹⁰⁾ その過程で同グループの主張に何らかの変化が見られたのか、見られたとすればどのような変化が生じていたのかを検討することは、これまで明らかにされてこなかったトルコのタリーカの変遷を理解することに資すると考えられる。

以下では、Ⅱでエレンキョイ・グループと月刊の機関誌『金の樋(きんのとい)』⁽¹¹⁾の概要を紹介し、ⅢとⅣで、1986年3月創刊号から2012年12月第322号までの26年9カ月分を第一期と第二期に分けて、その変化を考察する。⁽¹²⁾

Ⅱ. エレンキョイ・グループと機関誌『金の樋』

ナクシュバンディー教団の一派であるエレンキョイ・グループは、トルコの同教団の他のグループと同様に、オスマン帝国期に流入したムジャッディド派ハリディー支教団の系譜を引いている。エレンキョイ・グループの創始者は、現イラク北部の都市アルビール出身のメフメト・エサト・エルビリー(Mehmed Esad Erbili, 1847-1931)である。彼はハリディー支教団の創始者であるハーリド・バクダーディーのハリーフア(シャイフ代理)の弟子、すなわちハーリドの孫弟子であったことが知られている。⁽¹³⁾ エルビリーは、1930年にシャリーアの施行を求める反政府運動を策謀した疑いで逮捕され、服役中に死去している。二代目のシャイフはアナトリア中南部アダナ出身のマフムト・サーミ・ラマザンオール(Mahmud Sâmî Ramazanoğlu, 1892-1984)である。ラマザンオールはイスタンブールでエルビリーが率いる修道場に入門後、そのハリーフアになり、エルビリーの死後にはシャイフになった。トルコ共和国が建国され、1925年にタリーカの活動が禁止されると、ラマザンオールはアダナに戻り、説教師としてモスクに務めるかわり、個人的に集会を開き、ナクシュバンディー教団の教えを人々に伝授した。その後、再びイスタンブールに移住したラマザンオールは、1950年代初頭、イスタンブールのエレンキョイ地区にあるズィフニ・パシャ・モスクで教団の活動を継続することとなった。エレンキョイ・グループの名は、かつてこのモスクが所在していた地名に由来している。

1984年のラマザンオールの死後、シャイフになったのは、中央アナトリアに位置するコンヤ出身のムース・トプバシュ(Mûsa Topbaş, 1917-99)である。彼は兄弟とともに父親の設立した服飾関係の会社を

(9) 例えば、S. Ayata, “Traditional Sufi Orders on the Periphery: Kadiri and Nakşibendi Islam in Konya and Trabzon,” in R. Tapper (ed.), *Islam in Modern Turkey: Religion, Politics and Literature in a Secular State*, London: I. B. Tauris, 1991, 223-253; H. Demirel, “Türkiye’de Sivil Toplum ve Tarikatlar: “Altınoluk” Dergisi Çerçevesinde Nakşibendi Tarikatı Erenköy Dergahı,” Master’s Thesis, Kırkkale Üniversitesi, 1997; N. Göçeri, *Dini Grupların Eğitim Anlayışı*, Adana: Karahan Yayınevi, 2004.

(10) R. Çakır, *Ayet ve Slogan: Türkiye’de İslami Oluşumlar*, İstanbul: Metis Yayınları, 1990, 60; Yavuz, *Islamic Political Identity*, 144.

(11) 『金の樋』誌に関しては、市民社会論の視点に基づく修士論文、また、トルコのイスラームを概観する以下の著書のなかでの言及があるのみで、十分な分析がなされてきたとは言いがたい。Demirel, “Türkiye’de Sivil Toplum”; Çakır, *Ayet ve Slogan*, 58-60.

(12) 後述するように、1990年代末を過渡期として、『金の樋』誌は第一期と第二期に分けられる。第二期は、2015年現在も続いていると考えられるが、本稿では、両期の数量的な比較を試みることもあり、両期の期間に大きな差が出ないよう、2012年末までを分析対象とした。

(13) O. Tücer, “Osmanlı Anadolu’sunda Tarikatların Genel Dağılımı,” in A. Y. Ocak (ed.), *Osmanlı Toplumunda Tasavvuf ve Sufiler: Kaynaklar, Doktrin ve Erkân, Tarikatlar, Edebiyat, Mimari, Güzel Sanatlar, Modernizm*, Ankara: Atatürk Türk Tarih Kurumu, 2005, 231.

継ぐ一方、1956年にラマザンオールに師事し、76年にそのハリーファとなった。ムーサがシャイフとなった直後の1980年代後半からは、エレンキョイ・グループは寄進財によって運営される非営利団体や普通教育の学校を設立し、また本稿の考察対象でもある機関誌『金の樋』を創刊するなどの活動に着手した。1999年にムーサが死去すると、その息子オスマン・ヌーリ・トプバシュ (Osman Nûri Topbaş, 1942-) が新しいシャイフになった。トルコにおける経済発展と宗教規制緩和も手伝い、ヌーリは父ムーサの時代から行われていた活動を拡大させている。現在このグループは主に、スーフィズムの修行に加え、教育、出版、慈善活動を行っている。

以上見てきたように、エレンキョイ・グループは、エサト・エルビリーを創始者とし、スーフィズムを⁽¹⁴⁾実践する人々の集団である。ただし、トルコ共和国においてタリーカは法律上、非合法組織であるため、同グループはタリーカを名乗ることもなければ、集団としての明確な正式名称が付されている訳でもない。現在、グループの実質的な中心地はイスタンブルのウスキュダル地区にあるアズィズ・マフムト・ヒュダーイー・モスクである。⁽¹⁶⁾教団員数は公式には発表されていないが、ある関係者の話によれば、⁽¹⁷⁾およそ12万人だという。

現代トルコのタリーカが文字媒体を通じて教団の師弟関係を維持していると言われているように、エレンキョイ・グループにも同様の特徴が見られる。すなわち、エレンキョイ・グループの信徒は月刊機関誌『金の樋』を購読することが強く望まれており、⁽¹⁸⁾さらに興味深いこととして、雑誌の購読が「スーフィズムの実践」と見なされているのである。同信徒はイスタンブルを中心としつつ各地に分散しているため、全成員が一同に会する機会はなく、全員がシャイフから直接教えを受けられる訳ではない。その代わりに、グループはシャイフを頂点とするヒエラルキー構造を有しており、各県にはシャイフから直接に任命されるハリーファが、その下には市や地区毎の「読書会」の指導者が置かれ、一般の成員はその下に位置づけられる。グループ信徒は、週に一度の読書会に参加することが奨励されており、ここではイスラームに関する図書に加えて、『金の樋』誌が読まれている。このように、グループの成員はズィクル（唱名）修行といったタリーカの伝統的な修行に加え、読書会の参加や機関誌『金の樋』の購読により、エレンキョイ・グループへの所属を自覚し、グループの連帯を認識しているのである。

『金の樋』誌は1986年3月に創刊されて以来、グループが所有する出版社より刊行されてきた。⁽¹⁹⁾『金の樋』誌が創刊された1980年代は、印刷技術の進歩や経済の発展、イスラーム派勢力の伸長が顕著であり、⁽²⁰⁾当時は約50誌の宗教雑誌が店頭に並んでいたという。第1号によれば創刊の目的は、「善きウンマ」

(14) 近年では2代目のラマザンオールを初代シャイフと見なす考えが主流だという見方もある（関係者への聞き取りより。2013年1月、於イスタンブル）。

(15) 関係者の話によれば、近年では、グループの所有する財団の名を挙げた「ヒュダーイー・グループ (Hüdayi Cemaati)」や、機関誌『金の樋 (アルトゥノルク)』の名をとった「アルトゥノルク・グループ (Altınoluk Cemaati)」の方がより流布しているという（2011年3-4月、2012年10-12月、2013年1月。於イスタンブル）。本稿では便宜上これまでの研究に倣い、エレンキョイを用いる。

(16) 厳密に言えば、「タリーカ」の本拠地ではなく、同タリーカが運営する財団の本部である。先に述べたように、トルコのタリーカはタリーカとしての存在や活動を表に出さないことが多い。

(17) 『金の樋』誌の執筆者でもある教団関係者からの電子メールより（2012年8月24日）。同関係者によれば、グループの成員を数えることは不可能であり、総数を把握する試みはなされていないという。ただし、後述するように機関誌『金の樋』の購読がグループ成員に推奨されており、購読数が6万部で一家庭に一冊届けられるとすると、一家庭2人（夫婦）×6万部で、教団信徒は12万人いると概算できるとのことである。

(18) 同教団関係者によっては、タリーカ所属のための義務と見なす場合もある。

(19) 1994年1月まではエルカム出版 (Erkam Yayınları) から、1994年2月以降はアルトゥノルク出版 (Altınoluk Yayınları) から刊行されている。

(20) Ayata, "Traditional Sufi Orders," 223.

を設立すること、信仰心とイスラームの義務の実践を広め、強化することとされている。⁽²¹⁾当初は48ページ、5トルコリラであったが、ページ数が段階的に増加し、2013年2月の第324号は64ページ、8.5トルコリラ（約450円）である。雑誌名の「金の樋」とは、カアバ聖殿に設置されている黄金でできた雨樋を意味している。同誌によれば、16世紀のスルタン・スレイマンの時代以降、特に敬虔な人々が選ばれ、⁽²²⁾無償でこの樋を制作しており、雑誌名には、その名を冠するにふさわしい雑誌としてありたいという願いが込められているという。⁽²³⁾

『金の樋』誌の主要な流通方法は定期購読であり、店頭販売はイスラームに関する図書を多く扱う一部の書店に限られている。イスタンブールを含む5県に連絡事務所があり、また国内に留まらず、特にヨーロッパを中心に定期購読サービスを行っている。教団関係者への聞き取りによれば2012年8月時点の定期購読数は6万部とのことであった。⁽²⁴⁾また、同誌は英語やチュルク諸語、ロシア語、アラビア語などに翻訳され、トルコ語版同様に国外でも販売、一部は無料で配布されている。

『金の樋』誌では毎号、特定の主題に関して特集が組まれており、特集は主筆の記事、そのテーマの専門家が執筆した記事、専門家に対するインタビューから構成される。特集記事は雑誌の前半部分を占め、その後にはラマザンオール以降の歴代シャイフたちの執筆した文章や講話を文字起こした記事が続く。他にもイスラームの教義、預言者とその言行、共和国建国史、オスマン帝国史等に関する小文や、イスラーム関連の著書紹介、宗教的な詩、イスラームとは直接的には関係のない時事問題なども取り上げられる。

特集記事の主題は、主にムスリムとしての生き方やアッラー、礼拝や断食などの教義や信仰実践についてである。また、これらの項目に加え、家庭のあり方、スーフィズム、人格形成、経済、国内外の社会問題など多岐にわたるテーマが扱われる。これらの諸問題を専門家や専属の執筆者が解説するというのが『金の樋』誌の特集記事の大筋である。このように、『金の樋』誌には一見すると非宗教的な内容も記事の主題にあがることが多い。スーフィズムはあくまで雑誌の連載コーナーや主題の一項目として扱われるにすぎず、事情に通じていない読者が一読しただけでは、本誌を特定のタリーカと結びつけて考えることは困難である。『金の樋』誌の主な執筆者はというと、イスラーム的な価値を重視する知識人、⁽²⁵⁾イスラーム系新聞のコラムニスト、大学神学部の教員等から構成されている。

さて、1986年の創刊から2012年までの『金の樋』誌には、1990年代末を過渡期として大きな変化が見られる。その変化とは、雑誌の主要テーマである信仰以外の、直接的には宗教を主題としないテーマにおいて顕著である。以下では、1990年代末を境とし、『金の樋』誌を第一期と第二期に分け、特に雑誌の変化が見られやすい記事を取り上げながら、同誌の方向性がどのように変化したのかを見ていきたい。

III. 第一期（1986年～1990年代末）：政治批判

『金の樋』誌が創刊された1980年代は、自由経済の発展や宗教活動に対する規制の緩和を背景として、

(21) Editorial, “Aziz Okuyucu,” *Altınoluk* 1, March 1986, 2.

(22) Editorial, “Kısa... Kısa,” *Altınoluk* 1, March 1986, 41.

(23) Editorial, “Aziz Okuyucu,” *Altınoluk* 1, March 1986, 2.

(24) 2012年8月実施。2011年4月に聞き取りをした時点では、当時の購読数は5万部とのことであった。2回の聞き取りとも、出版社へ直接に問い合わせを行うことはできず、出版部数に関しては『金の樋』誌の執筆者である教団関係者を通し、間接的に聞くことができた。

(25) 一人の人物が複数のペンネームを用いる場合もあり、執筆者全てを特定することは困難である。

宗教系出版物の増加、モスクや宗教教育施設の急増、トルコ最大の宗教運動であるギュレン運動の拡大が見られた時期であった。⁽²⁶⁾ こうした動きを推進するイスラーム派と、それに反発する世俗派との対立が目立ち始める社会状況のなかで、『金の樋』誌は創刊された。そのなかで、第一期『金の樋』誌は、内政に関する諸問題への積極的な批判を展開した。ただし、トルコにおいては出版物の内容次第で執筆者が逮捕されることもあり、同誌は、政治を語る場合には曖昧かつ婉曲な表現を用いる場合が多い。そのため、何をもって政治を主題とする記事と判断するのか、その絶対的な基準を設けることは困難である。以下では、政治を主題としていることが比較的明らかな記事を見ていきたい。

第一期『金の樋』誌の特徴は、創刊から2年後の1988年5月から連載され始めた、国内外の時事問題を論ずる「今月の一言 (Ayn Notları)」に最もよく表れている。1998年9月まで継続的に掲載された「今月の一言」では、その大半において政治批判を展開している。曖昧な表現が多い中で、比較的、直接的な表現が用いられた例としては、1983年以来大統領の地位にあった軍部出身のケナン・エヴレンに対する批判が挙げられる。連載開始の翌年から見られるようになるそうした批判では、「クルアーンよりパンのほうが大事である」⁽²⁸⁾、「[断食月のため] 今日は昼から断食をしている」⁽²⁹⁾ などといった、敬虔なムスリムを「戸惑わせ」るエヴレン大統領の発言が詳細に取り上げられている。

その後、1996年に「イスラーム政党」⁽³⁰⁾ としては初めて、福祉党が、中道右派の正道党と連立政権を組む。福祉党党首エルバカンは、アタテュルクを記念する行事を欠席したり、シャリーアを求める行進に参加したりといった過去を有する、世俗派にとっての要注意人物であった。世俗派の懸念を裏切らず、首相就任の翌97年、エルバカンがタリーカのシャイフを首相官邸に招いたり、また同党に所属するスィンジャン市長がパレスチナのハマスを激励するパフォーマンスを行ったりといった行動に出ると、同年2月、ライクリキの擁護者を自任する軍部が介入し、エルバカン首相は辞任に追い込まれた。こうした動きの一環として、福祉党の解党を求める訴訟が憲法裁判所に提出され、結果として、同党は1998年に解散させられた。『金の樋』誌はこの時期、「今月の一言」のなかで、「国家は民主主義の試練に直面している」という見出しを設け、福祉党の解党に反対している。⁽³³⁾ そこでは、福祉党の解党を要求する世俗派は、政教分離原則の発祥の地である「西洋」の意向を気にするが故に、イスラーム政党である福祉党の解党を求めているが、そのやり方は、西洋が重んじるはずの「民主主義」に反するとして、反イスラーム政策の矛盾をついている。

このように、タリーカの出版するイスラーム系雑誌でありながら、『金の樋』誌は政治を論ずるにあ

(26) 新井政美『トルコ近現代史』みすず書房、2001、293.

(27) フェトゥフッラ・ギュレンを指導者とし、特に教育を重視する宗教運動。タリーカにあるような師弟関係はなく、市民社会運動としての側面も注目されている。幸加木文「第三共和制下のイスラム：ギュレン運動、公正発展党」新井政美（編）『イスラムと近代化：共和国トルコの苦闘』講談社、2013、193-208.

(28) ムスリムの義務のひとつである断食は、暁から日没までの時間に飲食などを絶つものであり、昼から断食をするという発言は一種の冗談にあたる。

(29) Editorial, “Ayn Notları,” *Altınoluk* 33, December 1988, 45; Editorial, “Ayn Notları,” *Altınoluk* 40, June 1989, 44.

(30) トルコ研究の文脈においてはイスラム派政党、親イスラム政党などとも。世俗国家体制を綱領の上では認めつつ、イスラームの価値を擁護する政党を指す。間寧「トルコ2002年総選挙と親イスラム政権の行方」『現代の中東』35 (2003)、69-79; 澤江史子『現代トルコの民主政治とイスラーム』ナカニシヤ出版、2005.

(31) エルバカンが設立した国民秩序党、およびその後継政党である国民救済党を前身とするイスラーム政党。前身となる2党のうち、前者は憲法裁判所により活動停止処分を受け、後者は1980年の軍事クーデターにより解散させられた。

(32) 幸加木「第三共和制下のイスラム」212.

(33) Editorial, “Ayn Notları,” *Altınoluk* 142, December 1997, 53-55.

たっては、シャリーアや公正 (adalet), 預言者の慣行といったイスラーム的な用語や価値は用いず、民主主義や、後に見るように、自由や人権など、近現代以降に普遍的と見なされる傾向にある概念を論拠に、それと「矛盾した」トルコの政治や国家のあり方に対し、批判を述べている。イスラーム派が民主主義を盾に世俗派へ対抗するこうした構図は、中山によるトルコの農村の研究でも指摘されている。⁽³⁴⁾『金の榎』誌にこうした特徴が顕著に表れるのが、教育制度改革に関する記事である。

教育制度改革は1970年代より議論され始め、小学校と中学校の一貫化、それに伴う義務教育の延長、および職業学校の中等部の廃止を主な内容とする。職業学校のなかには、イスラームの価値を重視する人材を大学、社会へ送り出す役割を担っていた導師・説教師養成学校が含まれていた。⁽³⁵⁾そのため、職業学校中等部の廃止はイスラーム派の反発を招き、結果として、教育制度改革はイスラーム派と世俗派の争点となった。しかし、1997年2月に国家保安協議会の月例会議にて、軍部は「反動勢力」の高まりを抑えるための決議を進め、その一環として、それまでの長年の議論を一足飛びにして、同年8月には上述の教育制度改革が実現される。『金の榎』誌ではこの教育制度改革が比較的早い段階から取り上げられている。以下では、特集記事を中心に同誌の見解を見ていこう。

まず、1992年6月に「教育におけるライクリキの銕」というタイトルで、建国初期以来の国是である「国家と宗務の分離 (devlet ile din işlerinin ayrılığı)」を意味するライクリキと教育の関係が特集されている。本特集では、トルコにおいて反イスラーム感情がどのように芽生え、なぜイスラームが問題とされているのか、その理由や過程が論じられる。⁽³⁷⁾教育制度改革の実施に関しては、「準備が整うまで、実施されるべきではない」とし、イギリスやドイツなどヨーロッパ諸国の教育制度の実例を挙げた後、以下のような理由を掲げて制度改革実施へ反対の意を示している。⁽³⁸⁾

これまで見てきたように、先進国では初等学校の後は生徒と保護者に選択の権利が与えられており、才能の伸長を促す構造が機能している。トルコのやり方とはいうと、まるで小学校をただ8年間に伸ばすだけのものである。……トルコの8年一貫制初等教育の実施によって、保護者は中学校の時期に当たる子どもたちを導く権利を奪われている。これは人間としての権利 (insanlık hakkı) である。もしこの国家が民主的であるのならば、子どもが自分の望む学校で学ぶ権利を国民から奪ってはならない。

(34) 中山紀子『イスラームの性と俗：トルコ農村女性の民族誌』アカデミア出版会、1999、41-45。

(35) 宗教的職能者を養成するための、中学校と高校に対応する公立の教育機関。1975年に大学受験資格が与えられて以来、同校卒業生の入学を許可する学部が増え、1983年には全ての学部への入学を許可する法律が制定された。İ. Bozan, *Devlet ile Toplum Arasında Bir Okul İmam Hatip Liseleri, Bir Kurum Diyanet İşleri Başkanlığı*, İstanbul: TESEV Yayınları, 2007, 11-48; T. C. Resmi Gazete 18081, 16 June, 1983, 6.

(36) “Laiklik” in Ş. H. Akalın et al (eds.), *Türkçe Sözlük*, Ankara: Türk Dil Kurumu Yayınları, 2011¹¹ (1945), 1572. ライクリキは、政教分離 (separation of religion and state) に加え、より広義な世俗主義 (secularism) と同義に用いられることも少なくない。日本語文献においても政教分離に加え、世俗主義の訳語も多く用いられる。ライクリキに関しては、粕谷元 (編)『トルコ共和国とラーイクリキ』上智大学イスラーム地域研究機構、2011および A. T. Kuru, *Secularism and State Policies toward Religion: The United States, France, and Turkey*, Cambridge & New York: Cambridge University Press, 2009 を参照。

(37) Y. S. Tan, “İmam-Hatip ve Kur'an Kursları Üzerinde 70 Yıldır Devam Eden... Laik Ambargo Ne Zaman Bitecek?,” *Altınoluk* 76, June 1992, 13-14.

(38) H. İ. Kurucan, “Bakanlığın İddiaları, Eğitimcilerin Cevabı: 8 Yıllıköğretim Ne Getirecek, Ne Götürecek?,” *Altınoluk* 76, June 1992, 15-16.

教育制度改革の実施直後に刊行された1997年9月には「教育における模倣の時代」という表題で、教育制度改革を当時の時事問題であった「クローン」と重ね合わせて「画一化」と描写している。巻頭ページでは、教育制度改革は導師・説教師養成学校の中等部を閉鎖するためだけに国家の全教育制度を変更させた、体制 (sistem) による「狂気の作戦」と表現され、最終的には「社会における [人々の] 敬虔さの高まり (dindarlık yükselişi) が抑えられること」を目指しているとされる。⁽³⁹⁾ こうした教育制度改革に対する批判の他にも、1986年から90年代末までの『金の榼』誌には、ライクリキおよび憲法のあり方が「社会 (toplum)」の意向に反していると述べ、批判的に問う記事などが掲載されている。⁽⁴⁰⁾

しかしながら、教育制度改革実施後の翌1998年からは、明確な政治批判を特徴とした記事は急速に減少していく。この変容は、しばしば、例外的に明白かつ過激な政治批判を行っていた「今月の一言」が1998年に実質的に廃止されたことにも表れている。⁽⁴¹⁾ 国内の政治、そして宗務庁や憲法などの国家体制に関する特集は、1997年まで (142号分) は18号がそれに充てられていたのに対し、98年以降 (180号分) は7号に減少している。2002年に中道右派のイスラーム政党である公正発展党が政権を獲得してからは、トルコの外交に注目した論説が稀に見受けられる程度である。⁽⁴²⁾

IV. 第二期 (1990年代末～2012年)：社会、個人への関心の高まり

前節で触れたように、1997年に軍部が主導したイスラーム派への弾圧は強硬なものであり、それはトルコ最大の宗教運動であるギュレン運動の指導者がそれを契機に亡命したといった出来事にも示されている。⁽⁴³⁾ そうした流れの一方で、2000年代に入ると福祉党の流れを汲む公正発展党の躍進が見られ、2002年には同党がイスラーム政党として初の単独政権を樹立するにいたった。公正発展党はこれまでのイスラーム政党の後継政党でありながらも、親欧米外交や経済政策など従来の政権の政策を継承し、また社会正義や減税を強調したことで、中道派や貧困層を含む幅広い層の支持を取りつけ、票を得たと指摘される。⁽⁴⁴⁾ 実際に、政権成立後の公正発展党は積極的な外交政策を主導し、経済面においても大幅な成長を達成、2013年には大規模な反政府デモも起きているが、2015年現在においても多数の国民の支持を得て、政権を維持している。このような政治的な変化が見られるなかで、『金の榼』誌にはどのような記事が表れているのだろうか。

1990年代末以降の『金の榼』誌の変化を示す最も顕著な例は、社会奉仕を主題とする記事である。社会奉仕に関する記事は1990年代初頭より散見されたが、政治に関する記事とは対照的に、1990年代末以降、急激に増加している。

こうした変化は、特集号の数や記事に用いられる用語の推移から確認することが出来る。創刊から1998年12月刊行の第154号まで (154号分) は社会奉仕を特集する号は2号のみであったのに対し、1999

(39) Editorial, “Altınoluk’tan,” *Altınoluk* 139, September 1997, 1.

(40) 例えば, A. Taşgetiren, “163 Sonrası,” *Altınoluk* 64, June 1991, 3-5; idem., “Hangi Laiklik?,” *Altınoluk* 102, August 1994, 3-5.

(41) 掲載開始から1998年9月までは毎号載せられていたのに対し、以降は1999年3月、2000年3月、2000年4月に掲載されているのみである。「今月の一言」をはじめ、連載記事の登場や減少、廃止に関する説明は見当たらない。

(42) 例えば, B. Demircioğlu, “Dış Politikada Geçen Ayın Serencamı Bölgesinde ‘Merkez Ülke’: Türkiye Stratejik Yükselişini Sürdürüyor,” *Altınoluk* 270, August 2008, 56-57; idem., “Kafkasya’da Taşlar Yerinden Oynadı Türkiye Denge Politikasında Başarılı Olabilecek mi?,” *Altınoluk* 271, September 2008, 55-56.

(43) 病氣治療を目的とし1997年にアメリカへ渡っていたが、同年の反イスラーム派運動の影響を受け、帰国を断念し、事実上99年に亡命という事態に追いやられたという。幸加木「第三共和制下のイスラム」219.

(44) 間「トルコ2002年総選挙」69-79.

年1月から2012年12月刊行の第322号まで(168号分)のあいだは9号がそれに充てられている。また、社会奉仕を論ずる際に同誌で頻繁に用いられる単語を題名にあげる記事数を1998年12月以前と1999年1月以降と比較すると、例えば、奉仕(hizmet)は10対36、援助(infak)は3対22、慈愛(şefkat)は7対16、相互扶助(yardımlaşma)は0対4、他にも、分かち合い(paylaşma)は0対4、寄進財や財団を意味するワクフ(vakıf)は8対24の内訳を示しており、1999年以降に社会奉仕を主題とする記事が増加したことが見てとれる。以下ではその内容を見ていきたい。

現在、エレンキョイ・グループは非営利団体や教育機関など、複数の組織を有しているが、その端緒となるのがアズィズ・マフムト・ヒュダーイー財団である。ヒュダーイー財団は、社会奉仕活動を目的として1985年に結成され、1992年には初めて『金の樋』誌にその活動についての記事が掲載された⁽⁴⁵⁾。1992年の記事では、ヒュダーイー財団が1989年より運営している老人ホームについて簡単な紹介がなされている。

その5年後の1997年には、イスラームの二大祭のひとつである犠牲祭のおりに、同じくヒュダーイー財団がトルコ東部の貧困者250人に食糧と掃除用具を支給したことが報じられている。この記事では、クルド民族運動によるテロや貧困問題が深刻なトルコ東部に関心を向けることが重要であると説かれ、その観点から同財団の活動は「非常に意義がある」と評価されている。また、1999年2月には「貧困と浪費の表裏」というテーマで特集が組まれ、貧困問題の現状などが扱われる。同号では、グローバル化によって経済格差が生じたことや⁽⁴⁷⁾、「富者」とされる人々が過度な浪費を行い、浪費が非道德的な事柄と結びつくと説明されている⁽⁴⁸⁾。このように、1999年以降は、財団の具体的な奉仕活動の内容を描く記事や、社会奉仕の必要性、国内の貧困問題やストリート・チルドレンなどのテーマが頻繁に取り上げられるようになる。

2001年以降は、これまで取り上げられていた国内の貧困問題に加え、旧ソ連圏に暮らすテュルク系の人々が奉仕の対象として注目され始める。これらの人々は、ソ連時代の政策の影響により宗教教育が不十分であるとされ、それを補完するためにトルコ人の支援が必要であると強調される⁽⁴⁹⁾。こうした国外へ⁽⁵⁰⁾と関心を向ける動きは、トルコの他の宗教運動や外交政策と同様の傾向にある。2006年以降は、アフリカが社会奉仕の対象として注目され始める。2007年にはグループが所有するヒュダーイー財団以外の団体の、国外における慈善活動の報告がなされ、献金をした読者へ感謝を伝えるメッセージも見られる⁽⁵¹⁾。これ以外にも複数の非営利団体に取り上げられ、犠牲祭やそれ以外の日常における慈善活動の様子、慈善行為を奨励する記事、募金の広告が複数回にわたり載せられている⁽⁵²⁾。

(45) Editorial, “Aziz Mahmûd Hüdayî Huzur Yurdunda... ‘Yaşhya Verilen Değer İnancın Kaynakları’,” *Altınoluk* 75, May 1992, 41.

(46) Editorial, “Aydın Notları,” *Altınoluk* 132, February 1997, 53.

(47) B. Demircioğlu, “Küresel Eşitsizlik,” *Altınoluk* 156, February 1999, 10-12.

(48) T. Sınay, “Tüketim Çılgınlığı Bir Hastalıktır,” *Altınoluk* 156, February 1999, 19.

(49) 例えば、E. Hazret & Altınoluk, “Moskova İhlas Vakfı Müdürü Enver Hazret ile... Moskova’dan Yükselen Bir Ses... Tek İstegimiz Dinimizi Öğrenebilmek,” *Altınoluk* 179, January 2001, 51-53; A. D. Aliyev & Altınoluk, “Kazakistan Diyanet İşleri Başkanı Abdüsselam Derviş Aliyev’le... En Büyük İhtiyaç Bilgili Din Adamı,” *Altınoluk* 180, February 2001, 48-51.

(50) 澤江『現代トルコ』110-114; H. Yavuz, “The Gülen Movement: Turkish Puritans,” in J. L. Esposito & M. H. Yavuz (eds.), *Turkish Islam and the Secular State: The Gülen Movement*, Syracuse: Syracuse University Press, 2003, 19-47.

(51) B. Çil, “Dünyanın Her Köşesinden Türkiye’ye Selâm,” *Altınoluk* 252, February 2007, 48-49.

(52) 例えば、idem., “Bir Kurban Böyle Geçti,” *Altınoluk* 264, February 2008, 57; B. Demircioğlu, “Afrika’ya Işık Sağan Sımsıcak Bir Gönül Projesi,” *Altınoluk* 267, May 2008, 54-55; S. Dâna, “Zenginlik Nedir Fakirlik Nedir?,” *Altınoluk* 286,

こうした活動の根幹にある理念として、政治批判の論拠になっていた人権や平等といった概念が取り上げられても不思議ではないだろう。しかし、こうした概念への言及は見られず、それに代わって用いられるのが、イスラーム的な理念である。とりわけ、社会奉仕との関連では、ムスリムの義務のひとつである喜捨が強調される。⁽⁵³⁾

喜捨 (zekât) は、全てがアッラーのものであり、全ての知識がアッラーに由来するという理解に私たちがいたらせるものである。……喜捨とは、自分がどのような貧困状態にあらうと他者に対する善行を、そして同胞が必要としているものを、自分の欲よりも優先させることなのである。……つまり、あなた方が人間に何をしようとそれはアッラーにしたことになるのである。

本来喜捨 (ザカート) とは、貧者や困窮者のために施しが課せられるムスリムの義務であり、貧困状態にある者は義務を免除されるはずである。エレンキョイ・グループの成員には裕福な階層の人々が多いという指摘があるように、上の記事では、読者のなかには、義務を免除されるほどの困窮状態にある者がいるとは想定されてはいないのだろう。同グループは、このような記事を通して、経済的に余裕のある成員へ慈善団体への喜捨を促していると考えられる。

2009年には「アフリカが呼んでいる」というテーマで特集が組まれ、アフリカの貧困に対しトルコ人、すなわち読者に何ができるかが問われている。こうした特集では、ヒュダーイー財団がムスリムの支援者としての意識を持ち、ブルキナファソやスーダンなどで、社会奉仕活動を展開していることが伝えられている。⁽⁵⁵⁾

社会奉仕に加え、女性を主題とする記事の増加も、第二期『金の樋』誌の特徴にあげることができる。『金の樋』誌において、スカーフ問題などとの関連で女性が話題になることはあったが、女性の生き方や女性の役割など、主体としての女性を扱う記事が取り上げられたのは1999年が初めてのことである。以下では、第二期の『金の樋』誌に特徴的な、主体としての女性に関する記事の内容を見ていきたい。

前述のように、政治批判が見られていた「今月の一言」は1998年10月以降、ほぼ掲載されなくなった。その5ヶ月後の1999年3月からは、この時期の『金の樋』誌の方針の変化を象徴するかのよう、「女性の教友」と題する連載コーナーが始まった。「今月の一言」と同様に、雑誌の終盤に掲載されるこのコーナーでは、毎月一人、預言者時代に実在したとされる女性を取り上げられ、女性読者のロールモデルとして描かれている。

その半年後の1999年11月号には、「女性と男性の僕としての地位」、「女性とアイデンティティ」という2つの記事が掲載されている。前者は、マルマラ大学神学部教授（当時。現宗務庁副長官）ハサン・チャーミル・ユルマズによって執筆されており、クルアーンを論拠にイスラームにおける男性と女性の地位について議論を行い、「イスラームが最も価値をおいたことに関して、女性と男性は同じ責任を分

December 2009, 31; C. Nar, “Demek Afrika’da Çağırıyor,” *Altınoluk* 285, November 2009, 44-46; M. Gedikli, “Nagodi (Teşekkür Ediyorum),” *Altınoluk* 287, February 2010, 47-49.

(53) R. Brodbeck, “Zekât Çağı Sevgi Çağı,” *Altınoluk* 269, August 2008, 46-48.

(54) Çakır, *Ayet ve Slogan*, 60.

(55) 例えば、A. Ergül, “Afrika’da İnsanlık Sınavındayız! Hüdayi Dostları Burkina Faso’da,” *Altınoluk* 270, August 2008, 52-53; N. Kaya, “Burkina Faso Fakir Ama Onurlu Orada, Afrika’da... Kucak Dolusu Sevgi...,” *Altınoluk* 279, May 2009, 49-51; B. Demircioğlu, “Güney Sudan Kime Emsal Olacak?,” *Altınoluk* 297, November 2010, 56-57.

かち合う」と結論づけている。⁽⁵⁶⁾ 後者は、ある女性執筆者によるものであり、トルコにおいて女性の社会進出やアイデンティティを求める運動が起きていることを受けて、それらの動きに対して以下のように述べている。⁽⁵⁷⁾

私たちの考えによれば、「アイデンティティ」を形成するのに「女性たること」のみでは十分でない。……トルコの〔世俗派〕女性団体は「どのような差別も受けないよう、女性の権利を擁護する」と主張し、この観点から「より多くの女性が議会に参入する」ために運動を行っている。しかしながら、〔世俗派女性団体は〕スカーフを着用した学生が大学〔に入れず、大学〕の門〔の前〕で待ちぼうけを食らっているのを……傍観するだけで、〔女性を〕排除する人々と〔結局は〕同じイデオロギーのもとで活動しているのだ。

トルコの女性運動は1980年代より活発な動きを見せている。特に90年代においては世俗派やイスラーム派のものなど、複数の女性団体が結成されており、⁽⁵⁸⁾ 上記の記事では、世俗派女性団体が批判の対象とされている。女性を主題とするこうした記事の登場は、女性団体の増加に加え、1990年代以降に仕事と家庭の両立、女性や母としての生き方の模索に対する関心がトルコ社会に表れてきたことに符合している。⁽⁵⁹⁾

翌月の1999年12月号にも女性について論ずる記事が掲載されており、そこでは「西洋」における女性の自由や平等は必ずしも肯定的なものとは評価されず、実際には「自由の名において受けている辱め」だと主張される。⁽⁶⁰⁾ このような記事では、女性を人として扱い、その存在を守る規範は、「西洋」の自由や権利といった概念ではなく、イスラームが基準とされている点が第一期とは対照的である。

2006年には、「10万家庭へ『金の樋』を」という読者数拡大のためのスローガンのもと、「この手紙を私たちの女性読者へ」という題名の記事が掲載された。⁽⁶¹⁾

『金の樋』の親愛なる女性読者へ。……私たちは、『金の樋』が届く家庭のもっともすばらしい読者が家庭の女性であることを知っています。……『金の樋』が10万家庭へ届けられる雑誌となるよう、皆で力を合わせましょう。……ご近所を尋ねるとき、『金の樋』を……紹介することができるでしょう。『金の樋』を知らない親戚に、あなた方が長いあいだ分かち合ってきた素晴らしさを伝えるようにして、〔雑誌を〕紹介することができるでしょう。

この記述では、『金の樋』誌の読者数拡大活動において、女性購読者の動員が図られていることがわか

(56) H. K. Yılmaz, “Kadın ve Erkeğin Kulluk Statüleri,” *Altınoluk* 165, November 1999, 48–49.

(57) H. Şekerci, “Kadın ve Kimlik,” *Altınoluk* 165, November 1999, 52.

(58) S. Şimşek, “New Social Movement in Turkey Since 1980,” *Turkish Studies* 5/2 (2004), 124–125.

(59) このことは、1990年に女性の地位・問題担当庁が設立されたこと、1990年代から2000年代にかけて、女性の労働組合や権利に関する複数の女性団体が設立されたこと、また90年代に女性に関する研究が増加したことなどに表れている。澤江『現代トルコ』223–227；村上薫「トルコにおける女性労働：研究動向の紹介」『現代の中東』26（1999）、43–57；村上薫「トルコにおける家族問題の政治化現象」『現代の中東』29（2000）、39–53.

(60) M. Toptaş & Altınoluk, “Mahmut Toptaş ile... Kadının İki Dünyadaki Cenneti...,” *Altınoluk* 166, December 1999, 54–55.

(61) Editorial, “Bu Mektup Hanımefendi Okuyucularımıza...,” *Altınoluk* 248, October 2006, 2–3.

る。実際に、筆者が現地調査で出会ったグループの女性のなかには、異なるタリーカに所属している婚約者に『金の榼』誌を読ませることで、「彼をグループに誘い」、勧誘は「うまくいきつつある」と述べる女性もいた。⁽⁶²⁾このように、エレンキョイ・グループは『金の榼』誌を通して、女性を中心にした、草の根的な信徒数拡大活動の促進を図っていると考えられる。以上の記事に加え、身体や精神の健康、家庭内の問題といった個人の生活に密着したテーマの登場と増加も、第一期の『金の榼』誌には見られなかった新しい特徴にあげることができる。⁽⁶³⁾

約言すれば、第二期の『金の榼』誌は、読者や、国内外のムスリム同胞が実生活において直面する諸問題を取り上げ、預言者の行動やイスラーム的な規範を用いて解説し、それらの問題に対処すべく読者へ助言を与えているのである。

V. おわりに

本稿は、現代トルコにおけるタリーカの一事例として、ナクシュバンディー教団の一派、エレンキョイ・グループを取り上げ、その機関誌『金の榼』を検討した。その結果、同誌は1990年代末を過渡期とし、宗教を直接の主題としない記事の内容において変化を見せていることが明らかになった。

1997年までの『金の榼』誌には、政治に関する記事が多数掲載されており、その記事の主題は世俗主義体制を代表する世俗派の左派政党や軍部、国是であるライクリキや憲法に対する直接的な批判であった。そこでは、シャリーアや預言者の慣行などの引用は一切なく、民主主義や人権、自由といった概念や、西欧先進国の事例が前提として是とされ、それに矛盾するとしてトルコの体制が批判されている。政治的な議論にイスラームを持ち出さない論法は、『金の榼』誌がトルコにおけるライクリキのあり方を批判しつつも、「国家と宗務の分離」というライクリキを規範とした土俵で議論していることを示している。

一方、ライクリキを度外視した活動の結果、イスラーム政党である福祉党は1998年に解党措置を受けている。これに先んじて、世俗派は、イスラーム派への弾圧の一環として、教育制度改革を議論している。これに対し、『金の榼』誌は多数の頁を割き反対したが、97年内に改革は実施されるにいたる。すると、『金の榼』誌は、世俗派に対する警戒心を強め、翌98年からは、それまで積極的に行っていた政治や国家体制に関する記事を速やかに減じさせた。そして、1999年以降はそれに代わって、社会奉仕や女性の生き方などに関する記事を取り上げるようになった。特に、社会奉仕に関する記事は2000年以降、大幅に増加しており、第二期『金の榼』誌において欠かせないテーマのひとつとなっている。これらの貧困問題や女性の生き方の模索などの問題に対する解決策としては、イスラームの教義や価値を論拠としている点が注目される。また、社会奉仕に関していえば、当初は主に国内の貧困問題を対象としていたのが、2001年からはテュルク系諸国へ、2006年からはアフリカへと対象が変化していることも確認できた。これらの記事では、90年代末以前の政治記事とは対照的に、「西洋」やその価値観は模倣すべき対象とはされず、困窮状態にあるムスリムにつけ入る狡猾な存在や、ムスリム女性の尊厳の維持に反するものとして描かれている。

(62) 聞き取り調査より（2011年3月18日、於イスタンブル）。

(63) 例えば、A. Akben, “Zikrin Sağlığa Etkisi,” *Altınoluk* 273, November 2008, 59; A. Y. Demirci, “Gönül Doktorundan Strese ve Sıkıntıya Karşı Tavsiyeler,” *Altınoluk* 277, March 2009, 39; A. Akben, “Öfkemizi Nasıl Kontrol Edebiliriz,” *Altınoluk* 290, April 2010, 62; A. S. Ekerim, “Aile İçi Şiddete Hayır: Pırlantaları Kırmayın,” *Altınoluk* 304, June 2011, 14-15; H. Yıldız, “Bir Genç Kızın Duyguları Aileye İhanet Ateşi Düşerse...,” *Altınoluk* 267, May 2008, 56-58.

このように、『金の樋』誌は、1997年の世俗派によるイスラーム派への弾圧を契機として、宗教・信仰を直接の主題としない記事の主題を変化させた。そして、2002年にイスラーム政党である公正発展党が総選挙で第一党となり、政治批判を行う必要性が低下したことを受けて、以降も政治に関する主張を控える方針を継続させたと考えられる。さらに、2000年代以降の経済発展も、上記の機関誌の変化の背景にあると考えられる。すなわち、富裕層を中心とした成員がさらに経済的な余裕を得たことで、社会奉仕のための寄付をより積極的に行うようになり、個々人の生活の質の向上に対する関心を高めた結果として、社会奉仕や女性の主体性などに関する記事が増加したと考えられるのである。

本論で述べてきたように、女性の社会進出や、社会奉仕活動の活性化および奉仕の対象としての国外への関心の高まりなどは、トルコ社会全体の傾向に概ね沿ったものである。⁽⁶⁴⁾トルコの他のタリーカやナクシュバンディー教団内のグループを通時的な視点から分析した研究が見られないため、エレンキョイ・グループの時代によるこうした変化をそれら他の集団と比較することはできないが、本稿では、エレンキョイ・グループの事例からトルコのタリーカのなかに、政治的、社会的変化に応じて活動を展開させていた教団があることを示すことができた。現代トルコ研究においては、ギュレン運動に注目が集まる反面、タリーカは周縁的な存在として扱われる傾向にあるが、本稿のようなタリーカの事例研究を積み重ねることは、トルコ・イスラームに対するより深い理解へとつながると考えられる。

(64) 澤江『現代トルコ』110-114, 223-227; 村上「トルコにおける女性労働」; 村上「トルコにおける家族問題の政治化現象」; Şimşek, “New Social Movement in Turkey”; Yavuz, “The Gülen Movement.”